

## 天正期宇都宮氏の城・館についての一考察

すがうら  
杉浦 昭博

### Iはじめに

### II城と館

### III宇都宮氏の支城支配

### IV城郭の機能論

本稿は、城館を通して中世大名の領国支配を探ることを目的としている。研究の対象については、記録・文書史料を補完する目的で現存遺構を採用することから、天正時代末期に設定し、当時県内において最も大きな勢力であった宇都宮氏の場合について考察することとした。その内容は以下の通りである。先ず、城と館とを定義し、城館に求められた機能を明確にする。次に同様の機能を持つ城郭を抽出し、特に多機能を有した大規模城郭について個々の事例を整理する。さらにこれらについて歴史地理学的な考察を加え、分布の特徴を抑える。最後にこれらの事例と僅かに残されている記録とを照合しつつ城郭經營から天正期の宇都宮氏領国支配的一面を考察するものである。

### Iはじめに

近年、中世城館研究の進展は目覚しい。従来まで個々に語られてきた城館は、在地領主の支配構造という視点に立った見直しが各地で進められている。

本稿は、天正末年頃の宇都宮氏について、領域内の城館をその機能に着目して分類し、もって同氏の領国支配的一面を考察するものである。

### II城と館

「城」とは戦時下に構築される防御施設であり、「館」は日常的な居住の場である。両者の外見上の相違は時代とともに変化しているが、文献資料にあたれば、中世の人々はその時々で城と館とを意識して区別していたことは明白である<sup>10</sup>。極言すれば、戦国末期では、簡素な墨塗が巡っているだけでは城とは認識されていなかった。つまり日常的な居住の場を設けた「城」は存在しても、防御施設が充実すれば「館」とは呼ばれなかつたということである。この意味において、「城」も「館」もひとまとめに「城館」と捉えるのは誤りであり、これを区別しなければ領国支配に迫ることはできない。館の墨塗については、千田嘉博氏が「軍事力の重層的な分有、といった中世を貫いた社会体制の特質を念頭に見れば、そうした小さな堀や土

星は、大名の大軍に攻められれば無力でも、小規模な勢力同士の戦闘では十分機能したのであり、その小さな堀や土星を備えることに、築城主体であった社会集団にとって重大な意味をもったということを見落としてはならない。」と述べている<sup>40</sup>。確かに本稿の主題に重要なのは城・館の経営主体を見極めることであり、そのヒントとなるのが「小さな堀や土星は、大名の大軍に攻められれば無力」であったという事実なのである。実際、戦国末期になれば、合戦は常に大きな城郭の近郊で生じており、特に壬生氏との抗争では互いが相手方の本拠地に乗り込んでの戦であった。一旦発動されれば、軍は難なく境界を突破し、相手領国内に深く侵攻して重要拠点を直接攻撃しているということは当時の領国支配の一面を如実に物語っているといえよう。

このような国人領主間の抗争にあっていわば無視されていた小居館の経営者は、宇都宮氏傍系の子孫や直臣の一族の他、土着の土豪・豪農であったとみられ、その名は数多くの文献資料に記されている。しかし、在地経営の拠点であり、生活を守る場であった彼らの居館は、戦の拠点となることはなく、彼らはより大きな権力である宇都宮氏の動員に応じて近郊の宇都宮氏支城に馳せ参じていたのである。本稿では、まずこのような村々の館と宇都宮氏の直接支配の城郭とを区別することから始めたい。

### III 城郭の機能論

城郭は互いに機能を分担し補完しあいながら存在していた。松岡進氏によれば<sup>41</sup>、城郭の機能とは、1. 軍事側面で領域の中心、2. 城領の支配をはじめとする在地支配の中核、3. 大量の兵員の駐屯地、4. 領域内外の味方中の証人の収容、5. 軍事情報の収集・通報、6. 城下の市町における物資の調達、7. 交通の監視、8. 物資の安定した輸送の確保であるという。こうした城館の機能については、宇都宮氏領国内の城・館に関しても重要な研究課題である。しかし、十分な文献資料や調査発掘事例の集積がない現状では、遺構の復元的考察や歴史地理学的視点からの補完による機能論とならざるを得ない。

まず、遺構（縄張り）から城・館の機能を考察する視点として次の4点を挙げたい。a. 虎口や星線に関する防御機能の発達、b. 兵員や物資を収容できる防御的な空間（曲輪）の配置や規模の発達・充実、c. 武士団の駐屯地（根古屋地名など）の存在、d. 集落地（宿）の存在<sup>42</sup>である。本稿では戦国末期城館の一般的な傾向に照らしつつ、上記4点の条件を満たす城郭を「大規模拠点的城郭」、a b c の条件を備えた城郭を「大規模戦時拠点的城郭」、a b または a c の条件を備えた城郭を「館城」、aのみの特徴が見られる城郭を「小規模城郭」とし、これ以外の館を「居館・居宅」と仮称することとした。なお、城郭は広義においてすべて戦時拠点であるが、ここでいう「戦時拠点的城郭」とは、城を核とする宿村の形成が見られなかつ

た大規模城郭のみを指している。これは、その地域拠点的な機能が軍事的・一時的なものであり、恒久的なものとは認識されていなかった城郭であり、多くは、地域情勢の変化に伴う中絶や再興の歴史を経験すると共に、天正末年には破却されている。

以上の観点から個々の城郭を抽出すると、天正末年頃の宇都宮氏領内の大規模城郭は、宇都宮城・多気山城<sup>6</sup>・多功城・大宮城・徳次郎城・大義城・児山城・上三川城・川崎城・御前原城・勝山城・飛山城・岡本城・高根沢城・阿久津城・真岡城であったといえる。以下、その根拠について述べたい。

### 1. 大規模城郭（拠点的城郭と戦時拠点的城郭の事例）

① 多功城 多功城跡周辺は開発が進み、現在は主郭の北側に若干の堀・塹が残るのみとなっている。第1図は野澤一夫氏所蔵多功城古図と戦後の航空写真・地籍図とを照合しつつ推定復元した縄張図である。一見して求心的な縄張りの城郭であったことが分かるが、注目すべきは外郭線の存在と小字「城ノ内」「台宿」である。外郭は古図にも描かれており、堀（もしくは土塁）痕は部分的ながら地籍図でたどることもできる。特に見性寺南で



第1図 多功城縄張図

は細道がクランク状に屈折し、樹形の存在を窺わせる。外郭が「本町」を開んでいたかは定かでないが、小字「二の谷」から、集落の西側に谷が想定でき、自然地形が外郭線を形成していたことも考えられる。その集落との関係を見れば、多功郡衙想定地に向かって城西を南北に走る道は古代から存在していた道であり、「本町」は築城以前から存在していた宿であったと考えられる。多功氏系図によれば、多功城は天文二十年に「西館」から「東館」へ移転したとされているが、事実とすれば城（館）は初めこの道を意識して建設されたと推測できる。城西に対し、城東の「城ノ内」は外郭線内の武家集住地とみられ、見性寺北側には崖敷割りの形跡がある。また、「台宿」はさらに外側に位置する付属の宿であった。このように広範囲な外郭線と宿の存在によって、多功城が拠点的な大規模城郭であった事が知れる。

② 犬養城 鹿沼市との市境に位置する犬養城については、遺構がほぼ完存しているにも関わらず、城歴には不明な点が多く、文書にも表れない。伝承に挿れば小山一族の築城とされるが、現存する縄張りに完成したのはその特徴から戦国時代末期であると推定され、当時の周辺情勢からみて宇都宮氏配下の城郭であったことは疑いない。犬養城は別名を「根古屋城」というが、その名の通り城東に小字「根古屋」「根古屋前」「根古屋町」があって、この周辺に城に

詰める者たちの居住地があったことが窺える。一方根古屋とは反対側の南西には「宿尻」の小字がある。現在「宿尻」一帯は水田耕地となっているが、城を巡るように短冊形の地割りが残っており、かつての宿の存在を思わせる。これらのことから犬養城は根古屋と宿とをもった大規模拠点的城郭であったと推測する。

③ 徳次郎城　日光街道徳次郎宿の南東端に位置する徳次郎城も犬養城同様に城主に関する史料的な裏付けが乏しい大規模城郭である。城主伝承のある新田氏については、「宇都宮記」にみえるが、その存在も含めて家臣団中の位置づけは不明である。城は複郭で、「隱岐殿屋敷」等中世城郭特有の曲輪名称と主郭を中心に機能的な曲輪遺構が残るが、外郭は近世日光街道に付属する宿場の発展によって遺構を残さない。

徳次郎城は、現在日光街道のすぐ東側にあり、北には羽黒道が接していて、一見これらの街道に沿った宿を抑える立地であるかのようにみえるが、中世の日光道は現在よりも西に約1km程離れたところを走っており、街道に沿って築城されたわけではない。道よりもむしろ田川を重視していたことが考えられる。徳次郎城の城と道・川との位置関係は勝山城に似ており、徳次郎城は田川という要害に据った軍事的な色合いの強い戦時拠点的城郭である。

#### ④ そのほかの大規模城郭

多気山城　多気山城は山頂を中心に山麓まで全山を城塞化した県内随一の規模を誇る山城である。山腹には家臣団の屋敷が構えられ、山麓には宿が形成されて、全国的に見ても天文・天文期特有の山城であるといえる。宿の存在については、「清願寺」「下河原」「粉川内」「源石町」など宇都宮城下と共に通する小字がみられ、これをもって宇都宮氏本拠の移



第2図 犬養城縄張図



第3図 徳次郎城縄張図



多気山城 虎口脇二重土櫓

動が行われたとする見解が荒川善夫氏によって示されているところである。

**川崎城** 城東の小字「館ノ川」に武家集住地があったものと考える。この南側に小字「古宿」があり、ここが川崎城に従属する宿の所在地であるとみられる。

**岡本城** 城の周辺には「根古屋」「城ノ内」「本宿」「新宿」の小字がある。根古屋が城東の低地であるのに対し、宿は反対側の台地に存在している点が大糸城と共通しており興味深い。

**真岡城** 城跡の周辺は近世以降も発展し続けて現在に至っているため、中世の景観を復元することは困難であるが、城は芳賀氏の居城であったから拠点的城郭といえ、「口ノ町」「戸外町」「田町」周辺に根古屋もしくは宿が展開していたことが推定される。

以上の拠点的城郭に対し、根古屋を持ちながら宿が発達した形跡のない戦時拠点的城郭には、徳次郎城の他、勝山城・上三川城・御前原城・児山城・高根沢城・阿久津城・大宮城・飛山城が挙げられる。これらの城郭の近郊にも宿の存在は確認できるが、これらは城の存続と一体であったとは考えにくい。城郭は戦時に限る拠点であったという性格から、既存の宿を吸収するに至らなかつたのである。

**勝山城** 城の地は古来靈場であったと伝わり、中世の宿は城東の「内御堂」にあった。ここは今宮社を核として発展した宿であり、勝山城には兵团が駐屯できる広大な外郭が存在したにも関わらず宿の存在を示す例証がない。

**上三川城・御前原城・児山城** 何れも家臣らしい人名や方向を示す郭（屋敷）を複数構え、広大な城域をもつ。縄張りは館城の特徴を残し、各曲輪は主郭を中心とする配置にならずに並立的である。従って城郭に関わりを持つ人々の居住地もそれぞれの郭周辺に分散しており、一つ場所に集住する宿の成立はなかったものと考える。

**高根沢城・阿久津城など** 高根沢城は古記録によれば大規模城郭であったようであるが、現存遺構が殆ど残らないため、その性格を明らかにすることはできない。城が構えられた台地から東方約750mの低地に字「宿」がある。阿久津城は城内に「辰街道」を取り込んだ閑所的な性格を持つ大規模戦時拠点的城郭である。大宮城と飛山城については次項でふれることにする。

## 2. 城郭と交通

城郭は単独で存在したのではない。地域の核となる城郭と周辺の小規模城郭、さらには居館・居宅を含めた「城群」が互いの機能を補完し合いながら存在していたのである。居城と支城との連携や各支城の機能を一層明らかにするためには中世の交通に注目しなければならぬ



勝山城 主郭虎口

い。ここでは、天正末期に使用されたであろう主要ルートについて考察したい。

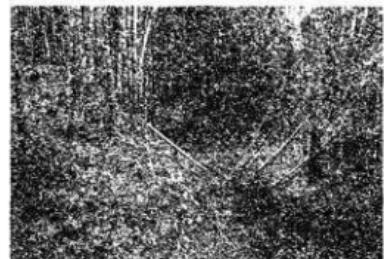
① 奥大道ルート　奥大道は大まかに近世の奥州街道にはほぼ沿っているルートを想定することができる。南方の境目は多功である。元亀三年（1572）12月の多功原合戦を皮切りに、以後度々侵入を繰り返す北条氏との主戦場は決まって多功周辺であった<sup>9</sup>。北条氏は奥大道を北上して進軍したと想定される。多功城・上三川城・児山城は宇都宮から約12kmの距離にあって一群を構成している。そもそも二里～三里の距離は伝馬制の目安であったから、当地は輸送・連絡手段上の中継点となっていたが、付近に奥大道・宮街道・結城道が集中していたことが、地域の重要性を一層高めたのである。多功城の周辺には居館・居宅が集中しているが、これらの主はいずれも多功氏の一族や配下の者達であった。つまり、この地域の居館・居宅は、村落支配者の住まいであると共に境目の拠点的城郭である多功城と密接に結びついた武士達の生活の場だったのである。

② 西方ルート　この道はかつて宇都宮氏が鹿沼・皆川方面へ侵攻する際に使用していたルートであった。しかるに天正七年頃からルート上にある壬生氏が北条方に与して宇都宮氏を離れ、皆川氏もこれに倣うようになったことで西方への道は閉ざされた。西方城は天正十八年に至っても尚宇都宮氏の持ち城であったという記録があるが<sup>10</sup>、以上の情勢からこれは信じがたい。壬生氏の離反によって宇都宮氏の境目は茂呂・石川辺りまで後退したが、この方面的境目の拠点は更に東へ退いて武子川を渡った地点にある犬養城であった。最前線に拠点が設けられなかったのは、緊迫した情勢の中でより要害性の高い地に拠点を築いたからである。犬養城は本城である多気山城とは中館を繋ぎに姿川で結ばれており、茂呂館や深津館・石川館・上茂呂館・西川田館・上田館などは犬養城を中心とする境目の「城群」なのである。

③ 益子ルート　益子氏は天正十一年頃から富谷付近の領有を巡って笠間氏と争うようになり、笠間氏を宇都宮氏が支援したことにより宇都宮氏との関係も悪化した。この時期の益子氏の所領は現在の市貝町南部から益子町にかけての一帯であったと想定され、これに直接接していたのは芳賀氏領内の城館であった。益子へ向かう南方ルートの拠点は真岡城であり、北方



多功城 全景（台宿付近から）



赤羽城 主郭南空堀

ルートには舟戸城・高橋城・赤羽城などが2km毎に所在して街道筋を固めていた。舟戸城は水沼館の要害であり、高橋城・赤羽城は館が拡張・補強されて城郭化したものである。現在でも赤羽城の一部に城郭化された居館の一部をみることができる。なお、天正十七年に益子氏が滅ぶと、益子領一帯は芳賀氏の勢力下に置かれたとみられ、真岡城は拠点としての性格を一層強めることになった。

④ 佐竹ルート 宇都宮氏の外城である佐竹氏は天正年間、求めに応じて度々下野に出陣している。既に茂木氏や武茂氏を家臣化していた佐竹氏は、宇都宮氏の目上の同盟者として領国経営にも大きな影響をもっており、常陸から宇都宮へ至るルートが整備された事は充分考えられる。特にその最短ルートである茂木・文谷・祖母井もしくは高根沢一遠場宿の道沿いには繋ぎの城として文谷城・祖母井城が整備され、鬼怒川を渡河する駐留拠点として飛山城が使用された<sup>6</sup>。現存する飛山城の外郭線は直線を基本として一定間隔に櫓台を張り出す構造になっており、複雑な折り畳みを造らない点で比較的短期間に造成された攻撃型の縄張りを採用したことがわかる。広大な外郭はおそらくこのときに最終的な整備が成されたのであろう。それまで芳賀氏の本拠であった飛山城は、宇都宮氏の後見である佐竹氏が後詰めの軍を駐留させるのに最も適した地となった。一方芳賀氏の側では、益子氏の動向が不穏になる状況下で境目近くへ本拠を移動する必要が生じていた。こうしたことから芳賀氏本拠の真岡移城が行われたのである。



飛山城 外郭櫓台と空堀跡

⑤ 那須・烏山ルート 那須氏の本拠である烏山へ至るルート途上には駐留拠点の高根沢城<sup>7</sup>があり、境目の城として桑塙城が構えられた。ただ、この方面では大規模な衝突は回避されており、那須一党との主戦場は塩谷地域の領有を掛けた篠川沿いとなっていた。

⑥ 塩谷ルート 宇都宮から塩谷へ至るルートは、鬼怒川の渡河地で大きく二つに分かれている。ひとつは岡本付近で渡河する道で、岡本城→阿久津城→勝山城→馬場城と進んで荒川を渡る。繋ぎの城郭には芳賀氏に関係する伝承をもつ大規模城郭が多く、これは、陸運と共に鬼怒川の水運を期待したことと関連がある。もうひとつは瓦谷館→逆面城→中里へと進み、羽黒山北で鬼怒川を渡河し、大宮城もしくは玉生城経由で塩谷へ入る道である。こちらは日光山勢力を牽制しつつ行軍するのに適したルートであるといえる。

⑦ 日光山ルート 山岳や丘陵が入り組むこの方面では、陸上交通と共に城郭を結んだ猿煙によるネットワークが想定できる<sup>8</sup>。則ち、多気山城（宇都宮城では八幡山辺り～戸祭館）－

横倉城—徳次郎城—寅巳山—蔵ヶ崎城—高徳城のルートである。これは言うまでもなく日光山勢力の南下東進に備えたものであるが、これと対応する日光山・壬生氏側の日光山—和泉城—板橋城—小倉城—鹿沼城という狼煙ルートも想定できる。天正五年から同十五年にかけての蔵ヶ崎と小倉というやや離れた二地点で同時に両者が衝突する<sup>6</sup>のは、互いに相手ルートの遮断を意図していたことを窺わせるものである。

⑧ 鬼怒川　鬼怒川西岸の上小倉から上三川まで約30mの間には、2km～5kmの間隔で城館跡が分布している。城館の間隔が5kmに広がる区域には岡本城・平出城が存在し、この他2km～3km間に存在したのは全て居館・居宅である。河岸に一定間隔で館が存在したことは、この周辺の農業經營が鬼怒川低地に展開していたことを窺わせるものであり、館の間隔は当時の村の規模を示すものとして興味深い。さらに、鬼怒川の水運<sup>7</sup>を考慮すれば、これらの城館は水陸交通という視点から捉えられるものである。

### 3. 城郭の記録から

大宮城　「今宮祭記録<sup>8</sup>」によれば、大宮城は天正十五年に再興され、上郷の衆が在城した。これは、当時の軍事的緊張（天正十三年薄葉ヶ原合戦以後、塩谷方面に那須氏が侵攻してくる状況）に備えた境目の城再興の記事である。大宮城は「宇都宮記<sup>9</sup>」によれば、天正四年時点で存在しており、城主と考えられる大宮氏は、「宇都宮興廢記」や「下野國権那帳」では上級家臣として記録されている。

しかし天正十五年に大宮城は「再興」され、上郷の衆が城番に就いたのである。これは次の二点を示唆する出来事である。則ち一つには城郭が恒常的な防衛施設ばかりでなく、戦に備えて再整備・再利用されるもの（戦時拠点）があったということ。もう一つにはこうして取り立てられた城郭が在地と強く結びついた家臣に与えられず、土豪の衆が番役を命ぜられたということである。

川崎城・玉生城　天正十七年に比定される国綱書状<sup>10</sup>によれば、川崎・玉生両「館」の守護を「替役差越」まで玉生遠江守と會曾河土佐守が勤めることが命じられている。文書中、玉生館は現存する詰めの城（要害）を付



大宮城 全景（集落より）



川崎城 全景（内川側）

属した館を指すと考えられるが、川崎館が川崎城を指すものかどうかは検討の余地がある。しかし、少なくともこの文書から、川崎・玉生両「館」へは宇都宮当主の命によって家臣が派遣されていたことが分かるのである。また、天正十四年には戸祭下総介が「御番手」として塩谷へ派遣されており<sup>6</sup>、塩谷刑部大輔宛国綱書状<sup>7</sup>によれば、玉生氏は塩谷への「使者」として度々遣わされていた。玉生氏等は当初「使者」であったが、後に「守護」となっているのである。

**藏ヶ崎城** 天正五年付保土島筑後守宛某書状<sup>8</sup>によれば、同年、藏ヶ崎城が「再興」したことがある。藏ヶ崎城も大宮城と同様に戦時に取り立てられた境目の城であったことがわかる。さらにその守備が比較的下級の家臣團に任せていたという点も大宮城と同じである。

**宇都宮城** 天正十三年と推定される国綱書状<sup>9</sup>によれば、当時の宇都宮城の守備は玉生美濃守高宗等であり、城には「外曲輪」があったことがわかる。中世宇都宮氏の城郭に外曲輪が存在した例証であるとともに、不明な点が多い中世宇都宮城の構造に関する数少ない史料である。

**多気山城** 「三十講表白」によれば、多気山城は、天正十三年に「城に取り立て」られている。このことは、結城晴朝書状<sup>10</sup>にも、国綱の居城宇都宮は「無抱」したので、新地を取り立てた。とあることから裏付けられる。

**宇都宮城の事例とも勘案すれば、天正十三年に宇都宮氏の本拠の移動があったことは確実である。**

**飛山城** 天正十五年付芳賀高綱書状<sup>11</sup>には、平石主膳亮が飛山に「在城」した功績により恩賞に預かり、さらに厳重に守備するよう命じられている。さらに「其地在城之者共」と相談して「普請等」を油断無く行うようにともある。このことから、当時の飛山には芳賀氏当主は居住して居らず、城は複数の家臣團によって守備されていたことがわかるのである。



多気山城 縦堀

#### IV. 宇都宮氏の支城支配

##### 1. 宇都宮氏の拠点的城郭についての総括

天正末年の宇都宮氏を巡る情勢は、戦時の連続であるが、中でも地域的に見て恒常的な軍事力の保持と在地支配を「拠点」的であると捉え、当時の戦術に即応した巧妙な縄張りと兵団を収容できる広大な郭の存在、流通や生産の基盤となる宿の存在といった観点から拠点的城郭の絞り込みを行ってきた。結果、天正末期の宇都宮氏は多気山城（宇都宮城）・多功城・大養城・川崎城・真岡城・岡本城の拠点的城郭を核にし、上三川城・児山城・徳次郎城・大宮城・

御前原城・勝山城・高根沢城・阿久津城・飛山城の大規模戦時拠点的城郭を要地に配していたことが判明した。

さらにそれぞれの地域にはこれらの大規模城郭を核とする城群が形成されており、こうした重層的な城館配置による領国支配を行っていたのである。また、大規模城郭は個々に多気山城（宇都宮城）と結ばれていただけなく、拠点相互の連携があり、地域共同体あるいは下部組織としての周辺中小城館を監督・統括する拠点でもあったのである。

## 2. 城郭と領国支配

先に例示した大宮城・川崎城・玉生城・飛山城は、伝承に拠ればそれぞれ大宮氏・塙谷氏・玉生氏・芳賀氏が築城した城郭であった。しかしに地方を代々支配してきた彼等土着の家臣を転封してその在地性を剥奪し、城郭の管理者を直接任命する政策が採られたことは、天正末年の宇都宮氏においてそれだけ集権化が進んでいたことの証である。このことについては他に幾つかの城郭について関連する事象を見つけることができる。例えば、上三川城は横田氏の築城とされているが、後の城主は上三川を名乗り、しかも上三川氏、横田氏が共に家臣の中で一定の勢力・地位を保持していたにも関わらず、慶長頃の城主は今泉氏であったという。これを一系統の氏族の整然とした相続と理解する<sup>9</sup>のは無理があり、特に宿老今泉氏への城主交代は宗家による施策であったと考える。史実であるかどうか確証がないが、慶長二年の宇都宮氏改易に際して今泉氏と芳賀氏が対立したという伝承は、案外この辺りの事情が背景にあるのかも知れない。また、岡本城の場合、系図に拠れば、城主は岡本氏から玉生氏へ移っているが、玉生氏が岡本と深く関わっていたことは、同氏が慶長以後岡本城近郊に帰農していることからも裏付けられる。祖母井戸では、信濃守定久がおそらく天正十四年頃、「在所替」によって山田へ移っている<sup>10</sup>。またこの南隣の赤羽には西方領主であった太郎左衛門が在所していたことが文禄元年付横堀文書や「下野國權郡事」に記されている。さらに、「下野國



犬養城 主郭北側空堀



上三川城 主郭（北西隅から）

「權那帳」では、益子城や笠間城など天正末期に宇都宮宗家によって打倒された一族の城郭にも他地域から家臣が派遣されていることが見える。これらのことから、宇都宮氏支城の配置換えは領国一円におよんでいたと推定されるのである。

下野國制覇を目指す小田原北条氏は、天正十年代に入ると宇都宮氏に対する攻勢を益々強めてきた。宇都宮氏宿老であった壬生氏はこれに同調して日光山と共に北条方に与し、西の境目は一挙に狹まってしまった。一方、北でもこれに呼応するかのように那須氏一党が領内に侵入し、天正十三年の薄葉ヶ原で敗戦した塩谷・宇都宮氏はここでも守勢に逼るのである。宇都宮氏は佐竹氏を盟主と仰ぎ、結城氏とも同盟関係を結んでこれに対抗するが、こともあろうか足下で益子氏の造反が起こってしまう。このような状況下、宇都宮氏は以前に増して権力の集中化を図らなければならなかった。その具体策の一つとして家臣を所領替えすることで在地と切り離し、支城の直轄化による直接統治を進めたのである。

では、こうした権力強化策は成功したのであろうか。宇都宮氏が豊臣大名に列してから僅か七年後に改易される際の様々な風聞・流説に接するとき、それは大きな疑問であると言わざるを得ないが、この点については別の機会に考察してみたい。

## V おわりに

以上、浅学であるのに加えて、紙面の都合もあり、憶測による断定的表現や論旨に十分な根拠を示していない箇所が多々あった。今後多方面からのご批判をいただきながら一層の研究を進めていく所存である。最後に、残された課題について数点を挙げて擱筆したい。

- ・多気山城（宇都宮城）と拠点の城郭との関係を中心に述べたが、支城である城館相互の連携や「城群」における機能補完の実際についてはさらに具体例を示す必要があること。
- ・中世における鬼怒川水運や「津」の事例、鬼怒川以外の水系（例えば田川、篠川、五行川など）を利用した交通の事例を蒐集すること。
- ・年次宇都宮尚綱書状（『小宅文書』『栃木県史中世史料編一』所収）にみえるように、家臣層が独自で築城を行ったことがあったのか。その究明。
- ・壬生氏や那須氏など周辺国人領主や北条・佐竹氏における支城網、支配実態（例えば番役、使者、守護など）との比較検討。
- ・「地利」「切所」「要害」「小屋」「堀」といった中世文書に表れる城館関係用語についての考察。
- ・天正期以前の宇都宮氏領域支配の変遷の解明。

## 註

- (1) 中世文書において「城」表記は合戦に関する記述の中に多く認められ、「城」は中世を通して「要害」「取出」「小屋」等と同様に戦に備えた防御施設であったと解釈できる。現在の城跡が特定できる例も県内全体で六十以上になる。一方、「館」用語の使用は「城」よりも遙かに多いが、「屋敷」「在所」を含めても特定の居館が比定できる例は十数例に過ぎない。多くの場合、「館」は領主そのものを指す言葉であり、一般的な語なのである。ちなみに近世文書では、中世まで「館」と表記されていたものを含めて殆どが「城」と呼称されるようになるが、このことは「城」意識が変革したことを窺わるものであるといえる。近世では「城」の中で日常的な生活が営まれることは当然のことであり、「城」と「館」とを機能で区別する必要がなくなったのである。
- (2) 千田2000
- (3) こうした「村の館」の経営者が社寺であった例が存在するのか、今後の課題としたい。
- (4) 松岡1991
- (5) 宿については、市村1994、池上裕子1990「市場・宿場・町」「日本村落史講座 第2巻 景観1」中世都市研究会編2000「都市の求心力」「中世都市研究7」新人物往来社などの論考がある。
- (6) 多気山城については、荒川喜夫「中世下野の多気山城に関する一考察」「歴史と文化」に詳しい考察がある。
- (7) 腹部1995
- (8) 多功に北条氏が初めて侵攻したのは元龜三年(1572)の事である。以後特に天正十二年からは頻繁に多功周辺を通過して宇都宮へ進軍している。
- (9) 西方城については、「関東八州諸城覺書」に宇都宮方と記載されていることから天正十八年まで宇都宮氏の領国下であったとするのが通説である。しかし、壬生氏や皆川氏等周辺領主の動向を勘案すれば、これは大いに疑問である。さらに、現存遺構の複雑な城内ルートや横矢の多用は、宇都宮氏の他の山城にみられるものではなく、北条氏による改修が推定される。「覺書」成立の背景には佐野了伯が関わっていた可能性は以前から指摘されているところであるが、「覺書」が本とした情報は天正十八年時点よりも數年古い可能性がある。西方城と西方氏についての詳細な考察は別稿としたい。
- (10) 佐竹氏が飛山に在軍したことが明らかなのは、「今宮祭祀記」に記された弘治三年のみである。しかし、宇都宮領への佐竹氏の出陣は天正十二年末から頻繁になっており、緊ぎの位置にある城館の中で大軍が駐屯できる広い郭をもち、北方の郡須氏にも南方にも備える意味で最も相応しい飛山がその後も使用されたことは充分考えられる。
- (11) 「高根沢町史」に高根沢城についての新しい考察がある。
- (12) 腹部英雄前掲書では、狼煙について事例を挙げて考察している。また、宇都宮氏領内付近の城館を結んだ狼煙ルートを想定したのが、西ヶ谷恭弘である(1989「古河城-黒川城を結ぶ支城網」「歴史群像シリーズ14 真説戦国北条五代」学習研究社 p.174-175)が、これには所在が明らかでない城館が含まれていることや、領主間の境目を考慮していないなど、課題を残している。
- (13) 蔵ヶ崎城が日光山勢力によって攻め落とされた報復に、宇都宮方は小倉城を攻略するが、城は直ちに日光山に奪還されたと伝えられている。
- (14) 中世における水運については、川名登「近世水運史の研究」、豊田・児玉1970、甘粕他1984、腹部1995に詳しい。
- (15) 西導寺本「宇都宮市史中世史料編」所収
- (16) 「宇都宮記」「宇都宮興廢記」「宇都宮市史中世史料編」所収、「下野國権那帳」「南河内町史」所収
- (17) 「青木家文書」「塩谷町史」所収
- (18) 04090920 「小田郡庄右衛門家文書」「栃木県史史料編中世二」所収
- (19) 輪王寺藏「鹿沼市史史料編中世」所収
- (20) 「歴代古案」「栃木県史史料編中世三」所収
- (21) 「秋田藩文書」「栃木県史史料編中世三」所収
- (22) 「上三川町史通史編第1章」

- 29 「佐八文書」「栃木県史史料編中世二」所収  
 ② 天正末期、宇都宮氏を初め、壬生氏、皆川氏、結城氏等は北条方に与するか、敵対するか何度も無く難合集散を繰り返した。しかし、天正十八年に最も近い段階では、佐竹氏・宇都宮氏・結城氏が養子縁組による同盟関係を結び、反北条勢力として結集を図っていたことが明らかとなっている。(吉田正幸「1991『宇都宮朝勝の結城氏入嗣について』『戦国史研究』戦国史研究会)

## 参考文献

- 甘粕健他編集 1984「交通・運輸」「講座・日本技術の社会史 第八巻」 日本評論社  
 荒川善夫 1997「戦国期北関東の地域権力」 岩田書院  
 市村高男 1994「中世東国における宿の風景」「中世の風景を読む 2」 新人物往来社  
 児玉幸多・坪井清足監修 1980「日本城郭大系」 新人物往来社  
 斎藤慎一 1991「本郷の展開」「中世の城と考古学」 新人物往来社  
 佐藤信・五味文彦編 1995「城と館を掘る・読む」 山川出版社  
 千田嘉博 2000「鐵壁系城郭の形成」 東京大学出版会  
 盛田武・児玉幸多「交通史」「体系日本史叢書24」  
 中沢克昭 1999「中世の武力と城郭」 吉川弘文館  
 横口定志 1990「中世東国居館とその周辺」「日本史研究」330号  
 1991「中世居館研究の現状と問題点」「考古学と中世史研究」 帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集 名著出版  
 服部英雄 1995「中世城館の研究視角」「景観にさぐる中世」 新人物往来社  
 藤木久志 1997「戦国の村を行く」 朝日新聞社  
 松岡進 1991「戦国期における境目の城と領域」「中世の城と考古学」 新人物往来社  
 他、栃木県史及び県内各市町村史、郷土誌

## 付録 宇都宮氏城・館類型表、所在図

- 記載事項の対象時代は天正期から慶長期である。従って対象時期に存在していない城郭や宇都宮氏領域外にあった城・館については省いた。これに相当する著名な城・館は、栗原寺城・真岡中村城・喜連川城・乙幡城・西方城・栗野城・鹿沼城・猪山城などがある。また、益子氏と笠間氏領内の城・館についても戦国末期の領域や滅亡前後の詳細が不明であることから省略した。
- 類型表の内容は、城・館名、所在地、主な城館主(伝承を含む)、立地、規模、形態等特記事項を記す。所在については現行の行政区としたが、一部に現在は使用されなくなった小字名が含まれている。
- 居館・居宅については、本稿の対象時代に当てはまらないものが含まれている可能性がある。また、記録のみで所在地が特定できないものについては、「か」と表記した。なお、本論の趣旨に従い、従来「○○城」と呼称されてきた居館についても「○○館」と表記し、備考欄に別称として従来の呼称を記載した。
- 作成に当たっては県内各市町村史所収の中世文書・記録・古地図それに現地調査を基本資料とし、近世史料を補助資料として使用した。近世史料の主なものは「宇都宮興廢記」「那須記」「宇都宮記」「宇都宮広巳家文書」である。この内、「宇都宮記」の城館に関する内容は「那須記」と重複しており、記述は「那須記」の方が誤りが少ないとから、「宇都宮記」の成立は「那須記」より後の事であると推定できる。また、「宇都宮広巳家文書」は(塙谷町史に所収)、塙谷郡内の特定城館に関する記載が「今宮祭祀記」に類似していることや中世には存在しないはずの村名を冠した城館が記載されていること、個々の村々の変遷の事例から推察すると、成立は17世紀半ば以前に遡ることはないと考える。こうした近世文書の扱いは慎重に行うべきであるが、個々の城・館について丁寧に検証すると、現存遺構と照合するところも多々あることがわかる。そこで、これらの近世史料については、宇都宮支配領域の範囲、郡名の誤記の有無、村落の立地等の検討を行った上で選択し、中世史料の補助資料として採用した。個々の事例については今後も引き続き検討したい。

### 戦国末期における宇都宮氏領内の城館類型表



御次郎城と田川

## 館城

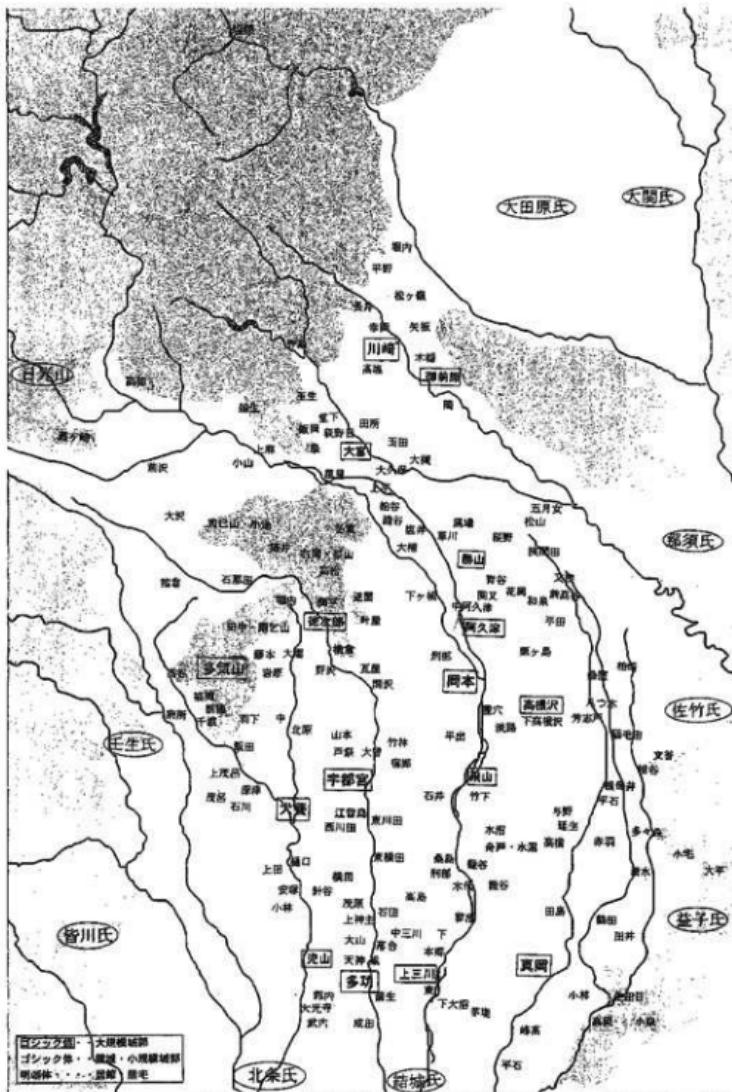
平出城	宇都宮市上平出町 北側 小字御城 中城、北城	平出城 屋代兵 鎌木光平 平石兵 小字あから尾の櫛辻に複数の界が存在していることが確認される。現状は土塁のごく一部が残るものであるが、築城の範囲をたどることは可能である。北方に広摩寺あり。主郭は50m四方。
馬場城	氏家町可成東	氏家兵、源清氏 方形施設を基本としているが、古圖にはそれが虎口や櫓矢の發射がされたら、また櫓頭の矢から構成されていたことが見える。築城するのは半町の大きさ一箇のみ。主郭周囲110m、城壁高15m×180m
祖母井城	青葉町祖母井新ノ内	始祖元兵、阿田兵、青葉兵 现在は主郭南側に土塁に張り出でたものであるが、かつては大規模な十曲が造っていたことは推察できる。櫻坂通りの野原山に不規則、「祖母井村野原山」にと呼ばれ、城壁は約40m×330m。
高橋城	芳賀町東高橋小字太郎門	高橋兵 大麻兵 番屋は削除、官給館が残るが、虎口や櫓等物など官給性は疑問。ただ、園中に「本城」「付城」の記述があるほか、城郭の界が記されており、参考となる。「太郎門村野原山」にこれれば、城壁は340m×180m。
赤羽城	赤羽町赤羽	赤羽兵、西方兵 現在は北側面の土塁と主郭南側の石垣の残骸の跡が残る。大規模な盛溝と虎口や櫓矢の發射から虎口側の改修は確実。かつては桜坂通りの範囲にも盛溝が存在していたという。主郭は100m四方で南北から20m×30mの幅がある。
江曾島城	宇都宮市江曾島町船合	島曾島兵 築城に際しては幅員が20mあったとみられることが。ただし、築城は不明で尾張・昌安があった可能性があり、また、天正末期に使用されたといいう釋疑は不可。昌安兵についても不詳。難波と想定した築城から推定すると城壁は126m×230m。
横田城	宇都宮市大庭町横田 舟守館	田代兵、舟守兵 築城に分離したは記述を見る限りが古い。堀脇城は五重塔であったというが、現在遺構は残かずこれを確認することはできない。天正末期には御用船頭であった可能性もある。北山側には城壁は270m×180m。
小規模城郭		
猪倉城	今市市猪倉	猪川兵 墓原城の時の城。山腹地の3割を中心とする山城で、主郭は22m×34m、標高420m、北高150m。瓦筒瓦円筒の札が発見された。正徳正年（1575年）に猪倉の領主がある。山袖としてその後も寄附。越后地は山裏に指定される。山頂部の跡が存続。
岡城	矢吹町猪川 猪川山	矢吹兵、森兵、佐谷氏の支城。内河の猪川役丘間に立地。猪前屋・川崎手手長の内河の抑えの城。逆式施設より全体の規模は大きくないが、虎口や櫓矢の發射があり、主郭北側に大堀池が存在する。御城（古河御城）。
藏ヶ崎城	今市市藏ヶ崎久保	久保兵、上郷兵 虎口に近い付近の狭い城。南袖であるが難波は不明。天正十五年十月二十日勘定したことが文献に記されている。
桑窓城	高根沢町桑窓	高根沢兵、玄蕃兵 玄蕃兵が筑城地の丘間に立地。馬込山抑えの城。藤田城文政城として正平十六年落城の記録がある。茅茅を基本としむが、虎門や櫓矢の發射と共に鐵圓筒の特徴が見える。主郭遺構はほぼ完存。居留区は南側の平尾地にあった。
小山城	今市市小山	若狭兵、鬼若兵右衛門の笠置山に立地。鶴井一郎の跡と鬼若城を説く。標高50m、北高60m。
逆面城	那珂内町逆面	逆面兵 山田郡逆面の長崎上から那珂内町に立地。瓦屋・一郎屋の跡。山頂間に箭の城を残す。東南山腹に石垣を置く。周の山腹にも石垣を设置して難波。跡の城の跡は40m。山頂の中央に難波を残す。山腹には白山神社が所存する。城壁200m×160m
塩原城	道原町若狭	道原兵、舟見兵、山川上町の笠置山間に立地。三武の御の跡の城。若狭は日付付の今井城であったという伝承があるが誤り。小字の下すとおり「若狭」であったが、城壁500m×500m
玉生城	佐野町玉生 小字玉生兵、石風兵、利手一郎の跡の跡。山頂に路地の城、東山裏に居城を置く。認めの城の標高は260m、北高は50m。山城小屋者・森小屋者	山頂に路地の城、東山裏に居城を置く。認めの城の標高は260m、北高は50m。山城小屋者・森小屋者
船生城	宿谷町可動寄山 宿谷町可動	宿谷町可動寄山の山地帯先端に位置する。高麗・玉生城と鬼若城の抑えの城。山腹地に認めた跡を抜け、南東山腹に難波を置く。跡の城の跡は40m。山腹地の中に難波。標高50m、北高50m、城壁250m×300m
松が嶺城	荒坂町上土佐仕合 小堀	荒坂町上土佐仕合の跡。松が嶺城の支城。内河支川中川の丘岸上に位置。御城・川崎手北の方の抑えの城。標高270m、北高30m。
舟戸城・ 水沼館	方原町水沼小字舟戸 舟戸・西舟戸	水沼兵、舟戸兵、舟戸は野川町の舟野地区の西に位置する。在原の先端に位置する。北高30m。逆式施設より3割を基本とする。舟戸・西舟戸は北側が広く、水沼側からの本格的な導防を行なった可能性もある。水沼側の運河は御城。
文谷城	市販町文谷小字吉 吉原	市販町文谷の対の城。小貝川右岸の丘陵上に位置。北高20m、丘陵部の主郭を中心に難波式に難波を配する。平垣地が狭く、城壁は別にあったか。天正二年昌興、御城兵が主郭とも。城壁125m×300m
鶴ヶ淵城	鹿沼町上三駒鉢川	鹿沼町上三駒鉢川の跡。慶長五年に西山城から、山城と街道を扼する長堀をら難波。山城は後醍醐城跡の跡が残る。
冬室城	上河内町冬室	西山城、御城兵は野川町の冬室の跡。標高200m～250m、北高20m～70m。東方とも本格を基本とする山城。西山城には後醍醐城跡の跡が残る。
府所城	鹿沼市府所町本町	鹿沼兵、萬川兵 在原の先端に位置。鹿沼城の跡に所在したという伝承がある。難波は主郭進によって消滅した。天正二年、昌興の先端により難波の伝承があるが疑問。石英や有られたこれまでに壬生城が支配か、難波は主郭を基本とするが難波が広く、鹿沼城跡の跡がある可能性も考えられる。城壁250m×300m
高德城	鹿沼町高德	高徳兵 新村城の跡の城。山腹に難波を置き、南山腹に難波を設ける。難波の標高は460m、北高が150m。難波は最初が残るもの、御城を平庄地は小さく、難波城稟度の跡とか。山腹の平庄地の遺構は御城。朱雀に施設が方舟である。
横倉城	宇都宮市下野倉	御城兵、御城兵と多気山・宇都宮方面との要衝の城。最難波背後の山頂に認めの城を置く。御城地は消滅。山城は2跡を中心とする。標高300m、北高40m
泉城	佐野町東平山	泉城 大官・玉生城の跡。山頂に跡があるが、草草、難波地は山麓にあったと考えられるが不詳。
雨乞山城 ・田中館	宇都宮市新里町 田中兵、ア竹兵、阿北山城は多気山・北山の牛尾。田中城は商業的720mの田中堀。阿北山城の標高は330m、北高は140m。田中堀は15m×100mだが、運河は殆ど無廻。	宇都宮市新里町 田中兵、ア竹兵、阿北山城は多気山・北山の牛尾。田中城は商業的720mの田中堀。阿北山城の標高は330m、北高は140m。田中堀は15m×100mだが、運河は殆ど無廻。
鳳見城・ 欠下館	佐野町鳳見町 欠下・少子	鳳見兵、足利兵、鳳見城は筑の城であるとともに鬼怒川の物見と大曾我の御の城。鬼怒城は東方に約720m離れた大下城と忘れられかねは難波の南側。鬼怒城の標高は225m、北高40m。
寅巳山城 ・小池館	今市市山口	寅巳兵、小池兵、福田兵、寅巳山城は日光御城の小池城と思われるが遠慮は消除。寅巳山城の標高は45m、北高180m。
右岡城・ 峯山城	上河内町中里	中里兵、右岡城は組めの城。主郭50m×40m。中里城は丘陵上に築かれた方舟密閉で難波をもつ。北高20m。土塁39m×50m。

居館・宿宅	
淡路館	宇都宮市向山町内。柱径上闇。底市氏 300×113m 倒壊。(復元)
石那田館	宇都宮市西条町向山 棟長上闇 小池氏 稲田氏 100×60m。柱径1.5m。外装あり。
大堀館	宇都宮市西条町向山。外装あり。半田氏 100×60m。柱径1.5m。
刑部館	宇都宮市西条町向山ノ内。半地盤、外装あり。 河原氏 40×90m。窓格子(明治時)
瓦屋館	宇都宮市瓦町村 手塚屋 瓦屋氏 大庭氏 半田氏 半地盤。外装あり。
森島館	宇都宮市上久慈町小川・森島氏 半地盤、外装あり。森島氏 50m×30m。柱径1.5m。
戸祭館	宇都宮市門前町寺町内。半地盤。河野氏、森谷丁番地
羽下館	宇都宮市中塙町羽下村 手塚屋 羽下氏 戸祭丁番地 柱径1.5m。柱上端に切妻。半地盤。
樋口館	宇都宮市赤堀町樋口 手塚屋 樋口氏 90×90m 倒壊。(樋門氏)
堀ノ内館	宇都宮市堀ノ内町内。半地盤
茂原館	宇都宮市茂原町内。既足・上足。茂原氏。背脂(赤茶枝)
飯田館	宇都宮市生駒町地内。飯田氏
木代館	宇都宮市木代町内。今井氏、五月女氏
関沢館	宇都宮市武内町向山。関沢氏
竹林館	宇都宮市竹林町地内。竹林氏
西川田館	宇都宮市西川田町地内。鬼井氏
針谷館	宇都宮市針谷町地内。針谷氏
福岡館	宇都宮市福岡町内。福岡氏
岡本刑部館	河内町守岡本守邸 千代氏 四本氏
叶屋館	河内町叶屋町地内。葉屋氏
大桶館	上河内町大字大桶半蔵・千代屋 大桶氏 別称「金堂院」。洋漆板貼り窓
籠谷館	上河内町小谷 手塚屋 篠谷氏 小室社跡附近
高松館	上河内町高松地内。
石田館	上河内町西田・手塚屋。外装あり。 外装横幅約110cm
落合館	上河内町中子千地蔵舍合式
高島館	上河内町西田・手塚屋。外装あり。高島氏 外装横幅120cm以内。
天神館	上河内町多賀 手塚屋 志緒氏
本郷館	上河内町本郷 手塚屋 遠藤氏 面積50m四方。 別称「虎屋」
蒲生館	上河内町牛生蒲生山。蒲生氏
東館	上河内町東室町地内。上河内城跡と思われる。
成田館	上河内町成田守邸内か。成田氏
石井館	宇都宮市吉川町内。内・外壁面。半地盤。 石井氏。物販業。別称「白洋館」
岩原館	宇都宮市吉川町向山 / 内・半地盤。吉原氏 60×100m 柱径1.5m。
岡平館	宇都宮市八幡町 平地盤。背後の丘峰山に御見ゆ。
上籠谷館	宇都宮市上籠谷町内。既足・上脚。 荒井氏、上笠氏、荒井氏
北原館	宇都宮市山之原町北原 平地盤。占山山腰によれば、施設は7世 紀頃の「北原館」。
篠井館	宇都宮市篠井町上篠井坂ノ西 高坂二层 大庭氏 篠井氏(「篠井館」)
中館	宇都宮市中馆山周囲 地盤高 70m四方。 既足・中脚。
荒丸鬼館	多角的四隅丸。會津氏 戸井氏 安食氏 余武氏
大曾館	宇都宮市大曾町字中橋。人曾氏
宿郷館	宇都宮市宿郷地内。矢代氏
竹下館	宇都宮市竹下町字尾山。竹下氏
田野館	宇都宮市田野町地内。佐 田氏
野沢館	上河内町野沢町地内。中山寺木氏
東横田館	上河内町山城町地内。神戸氏
山本館	宇都宮市山本町字豊山。山本氏
下ヶ橋館	河内町下ヶ橋町地内。半地盤。下ヶ橋氏 別称「下ヶ橋屋」。
大山館	上河内町大山・半地盤。外装あり。 外装横幅約100cm
下館	上河内町上栗・手塚屋
蓼沼館	上河内町蓼沼町 手塚屋 正徳氏 100m四方。 別称「天文学人・数学家・植物学者」。蓼沼小学校
梁館	上河内町梁町 手塚屋 梁氏 梁山房。
上神主館	上河内町上神主・手塚屋。植良氏
中三川館	上河内町中三川町内。神益氏 神木氏
落山館	内・外壁面。落山氏



桑塙城 主郭南面土壘と虎口

居館・居宅			
木幡館	矢板市木幡小字八尺内。平地館 三上氏	幸岡館	矢板市幸岡 幸丘上屋 幸岡氏 別称「幸賀館」
長井館	矢板市长井小字櫻ノ内 平地館 道臣氏 手原氏	堀之内館	矢板市下伊佐野櫻ノ内 平地館 道臣氏
矢板館	矢板市矢板小字櫻ノ内 平地館 矢板氏	大槻館	矢板市大槻地内か。大槻氏
高塙館	矢板市高塙小字古里敷内か。高塙氏	玉田館	矢板市玉田地内か。玉田氏
平野館	矢板市平野地内か。平野氏		
五月女館	音羽川町乙女地内か。五月女氏		
岡本と泉館	高根沢町花町大屋 平地館 岡本氏	柏崎館	高根沢町下柏崎小字櫻敷前 平地館 岡本氏
花岡館	高根沢町花岡小字内里敷 平地館 花岡氏	平田館	高根沢町平田宿城地 平地館 平田氏
青谷館	高根沢町人谷寺内か。青谷氏	栗ヶ島館	高根沢町栗ヶ島地内か。矢口氏 菅賀氏 道臣氏
関又館	高根沢町南又地内か。青色氏	中阿久津館	高根沢町中阿久津地内か。中阿久津氏
文挟館	高根沢町北挟地内か。高根沢氏	前高谷館	高根沢町前高谷地内か。平野氏
桜野館	北条町桜野小字吉野井 平地館 稲見氏 稲見氏 別称「桜野館」	挾間田館	北条町挾間田小字吉野井ノ内 平地館 挾間田氏 別称「挾間田館」
松山館	北条町松山小字本厚内 幸丘上屋 松山氏	草川館	北条町草川村分合。草川氏
大久保館	猪俣町大久保小字西第 幸地館 大久保氏	寺島館	猪俣町幸地館 幸地館 和氣氏
堂下館	猪俣町幸道屋 幸地館 上山氏 飯曾和氏	飯岡館	猪俣町幸岡地内か。飯岡氏
上平館	猪俣町上平地内か。上平氏	萩野目館	猪俣町萩野目地内か。上平氏
上麻館	猪俣町上平地内か。上平氏 大槻氏	田所館	猪俣町田所地内か。田所氏
赤坂館	赤坂郡内か。不詳。赤坂氏	上谷館	赤坂郡内か。不詳。赤坂氏
中村館	猪俣郡中村。不詳。猪俣氏		
茅堤館	高岡市茅堤小字船出 平地館 芳賀氏	小林館	高岡市小林・宮神社裏 平地館 小林氏 芳賀氏
籠谷館	高岡市下籠谷小字首屋 鎮丘上屋 篠谷氏	下大沼館	高岡市下大沼小字古里敷 平地館 篠谷氏
清水館	高岡市清水小字櫻ノ内 平地館 清水氏	田井館	高岡市東田井敷ノ内 平地館 旗瀬氏
田島館	高岡市田島 平地館 田島氏	鶴田館	高岡市西照屋敷内 平地館 平田氏
高岡館	高岡市高岡地内か。高岡氏 芳賀氏		
小泉館	猪子町小泉 平地館 小泉氏	大平館	猪子町大字平泉ノ内・牧者 鎮丘上屋 鈴木氏
小宅館	猪子町小字日向 旗丘上屋 小宅氏 13世伊方屋(小宅家)	生田目館	猪子町生田目山・上締・中締・下締 旗丘上屋 猪子氏 旗城の可能性もある。
稻毛田館	芳賀郡稻毛田小字新屋敷 幸地館 稲毛氏	平石館	芳賀郡下平地住民住。平石氏
水沼館	芳賀町水沼字忍野 幸地館 芳賀氏 三津近氏	下高根沢館	芳賀町下高根沢地内か。高根沢氏
芳志戸館	芳賀町芳志戸地内か。大谷氏	延生館	芳賀町上延山合戸敷合。但井氏 延生氏
八つ木館	芳賀町八つ木地内か。八木氏	与野館	芳賀町与野郷ノ内か。若島氏
椎谷館	佐貫町椎谷小字櫻ノ内 鎮丘上屋 喜兵氏	多々良館	佐貫町多々良屋古御殿 平地館 多々良氏
峰高館	二宮町峰井跡高 平地館 田代氏 150×100m	平石館	二宮町奥 平地館 平石氏 别称「廣鏡」
大島館	芳賀郡内か。大島氏	菅谷館	芳賀郡内か。不詳。菅谷氏
田野問館	芳賀郡内か。不詳。田野問氏		
郭内館	石橋町下石橋羽内 平地館 徳木氏	大光寺館	石橋町東前大光寺 平地殿、外郭あり。 外郭被120×150m 别称「大光寺坂」
武内館	石橋町下大橋小字内小内 平地館 徳木氏		
上田館	壬生町大田 平地館 大田氏 別称「上田城」	小林館	壬生町北小林 平地館 山の井氏
安塙館	壬生町安塙地内か。石川町上長浜屋と同一か。		
石川館	高岡市下石川町ノ内 幸丘上屋 石川氏 北条氏 別称「石川城」	上茂呂館	高岡市下茂呂屋ノ内 平地殿 山崎氏
高谷館	高岡市高谷 平地館、外郭あり。板垣氏 150×100m 别称「高谷城」	千波館	高岡市千波 平地殿 千波神氏 100m四方。 別称「千波城」
板塙館	高岡市板塙ノ内		
深津館	高岡市深津 地上屋、横櫛。小林氏 外郭被130×100m 别称「深津城」	茂呂館	高岡市茂呂 平地殿、茂呂氏。茂呂内山田 氏外郭被115×200m 别称「茂呂城」
大沢館	今市大沢町 幸美館 大沢氏 佐世大沢御殿	莉沢館	今市大沢御殿内か。絲井氏



第4図 戦国末期における宇都宮氏領域の城・館分布図